新潟県の名水（平成３０年選定）

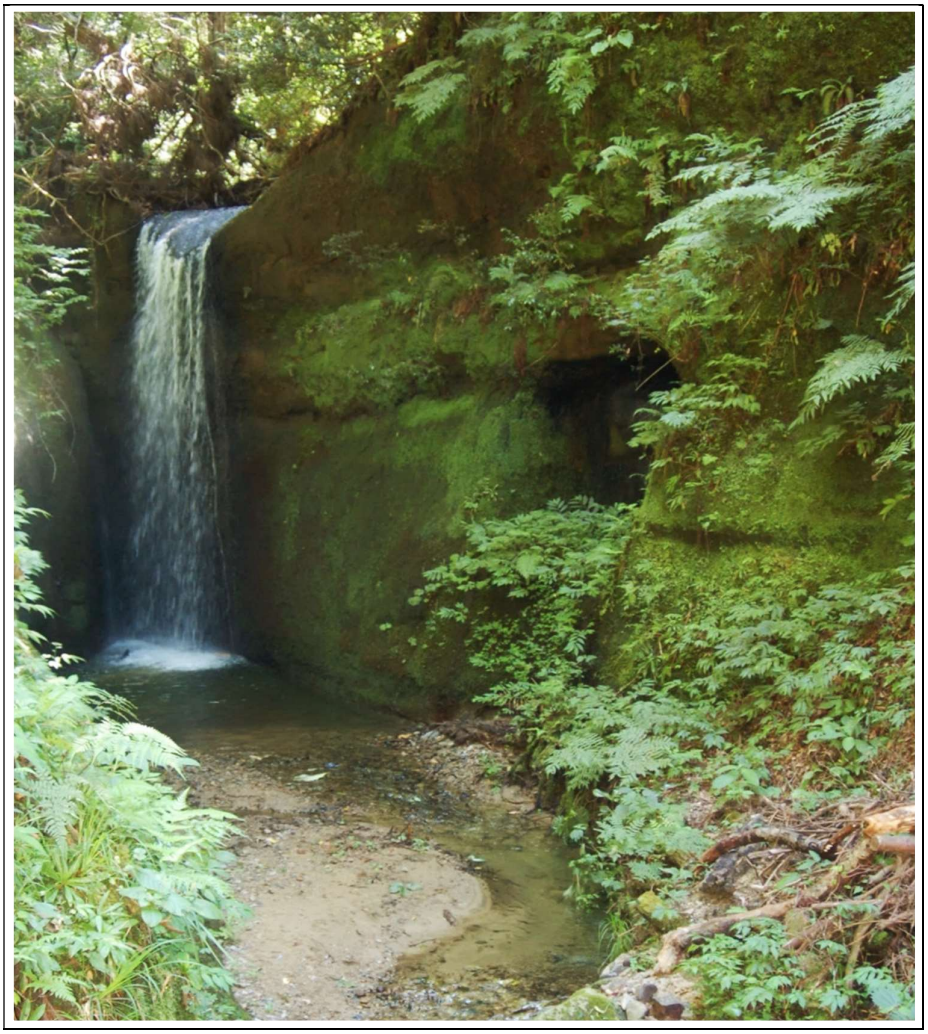
桃川（ももがわ）のおたきさま

桃川の南東に広がる山塊（さんかい）の幾筋もの沢水を集めて根古屋沢（ねごやざわ）を流れた川が、ここで2段の滝となっている。

国道から見える滝は2段目の滝で落差が約5mある。1段目はこの約40m上流にあり、これよりわずかに小さい。

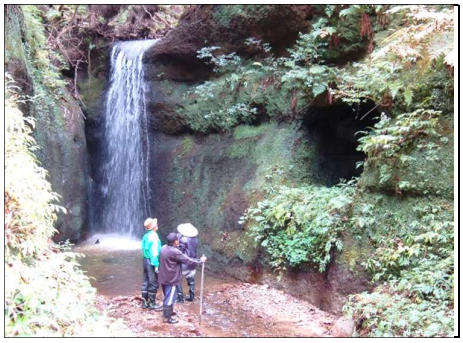
古代の桃川の人々はこの滝に神威（しんい）を感じて多伎（たき）神社を祀り、以来村人から「おたきさま」と呼ばれ崇敬（すうけい）の場となっていた。中世の時代には山岳信仰（さんがくしんこう）の修験（しゅげん）の場となったと考えられ、崖（がけ）の岩窟（がんくつ）はその遺跡と推測されている。

多伎神社は明治40年（1907）に式内桃川神社に合祀された。それまで建っていた社殿は現在跡形（あとかた）もないが、「明治5年絵図」に見える赤い鳥居に掲げられていた多岐神社の神社額が桃川神社に保存されている。

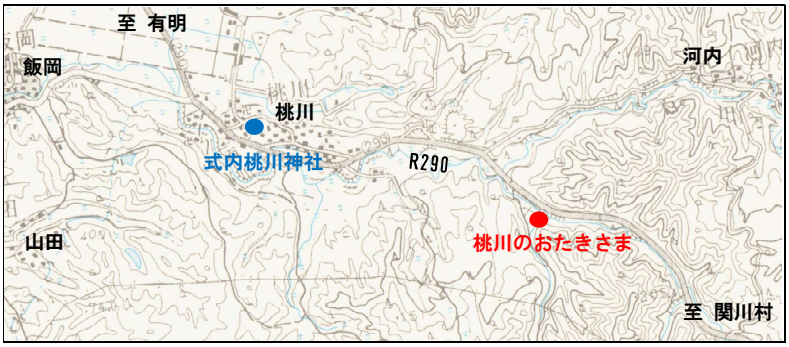


多岐神社額　（桃川神社蔵）

明治5年多伎神社絵図
（佐藤栄之進氏 蔵）



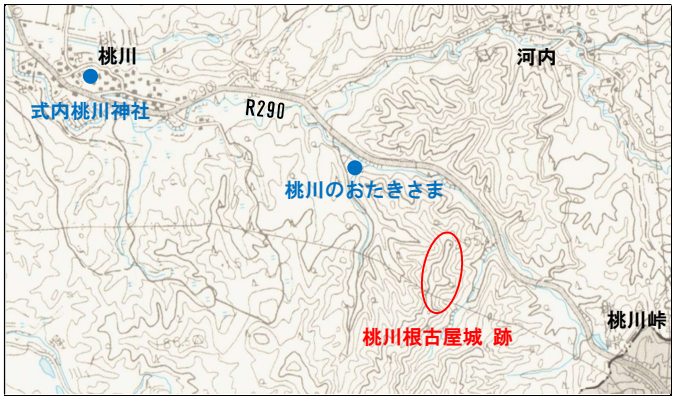
滝と崖の岩窟



戦国時代の山城　桃川根古屋城 跡

桃川根古屋城跡の全貌　（ 中央の頂上部が本丸　雪消えの様子から段々がわかる　　標高 260m ）

頂上本丸跡から西側の眺望
第９回 桃川根古屋城登山会 平成 31 年4月14日



尾張の織田信長、甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信ら全国に戦国大名が割拠していた時代、この地域では府屋の大川氏、大場沢の鮎川氏、村上の本庄氏、平林の色部氏の４氏が互いに勢力を競っていた。

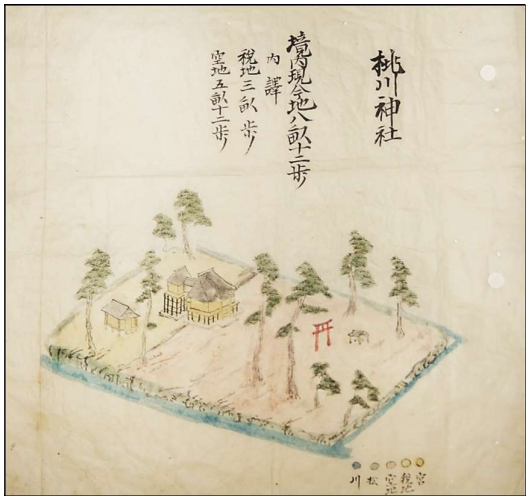
中世の時代に「小泉の庄（村上市）」と「奥山の庄（関川村）」との庄境、桃川峠を抑える位置に築かれた桃川根古屋城は、遺構の状態などから戦国時代に桃川村の豪族（村殿）であった桃川氏が維持していた。

桃川氏は平林の色部氏の「御家風衆」の一人で、戦になると高級将校の役割を果たした。城は戦国時代に特徴的な堀切、土塁、切岸、曲輪で構築され石垣は使用されていない。現在もこれらの遺構が見事に残る。

慶長３年(1598)、色部氏が上杉景勝に従って出羽国に移ると桃川氏も色部氏に従って桃川を去り、城は廃城になった。桃川氏の子孫は現在米沢市にいる。桃川氏の墓は、米沢市窪田町の色部氏菩提寺である千眼寺にある。

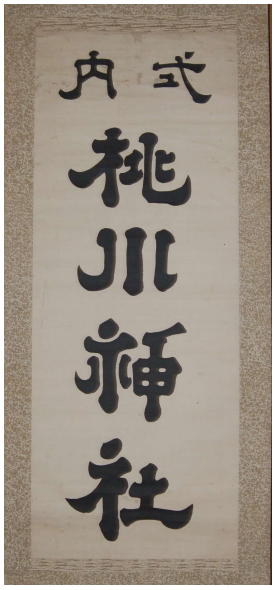
毎年４月に、地元の歴史グループが広く市民から参加者を募って桃川根古屋城登山会を実施している。

式内（しきない）　桃川神社（ももがわじんじゃ）



明治５年　桃川神社絵図（佐藤栄之進氏蔵）

現在の桃川神社　　左に建つ神社碑に「式内桃川神社」とある



千里啓揮毫の御神号軸
（桃川神社　蔵）

今から１１００年もの大昔、平安時代の延長（えんちょう）５年（９２７）に醍醐天皇（だいごてんのう）の命で編纂されていた『延喜式（えんぎしき）』という書き物が京都で完成した。その延喜式の「神名帳（しんみょうちょう）」の中に「桃川神社」が登場する。この『延喜式神名帳』に記載されている神社は「延喜式内社（えんぎしきないしゃ）」または「式内社（しきないしゃ）」と呼ばれ、古くからの格式が高い神社とされる。村上市岩船郡の中では「岩船郡八座（いわふねぐんはちざ）」といわれ、８社がこの格式を誇っていた。

今から１１００年も前の平安時代に桃川神社の名が、京都の朝廷に知られていたことは驚きであるが、すでにその頃には桃川神社の維持管理、祭の継続のために桃川に集落（村）が形成されていたことになる。桃川村はとても古くからの村なのである。

現在の社殿は江戸時代末期に建てられたと考えられているが、貴重な品々もいくつか伝わっている。御神刀として室町時代の「備前長船則光（びぜんおさふねのりみつ）」がある。また、江戸時代後期に桃川村が奥州白河藩領（おうしゅうしらかわはんりょう）となった関係からか、藩主松平定信（まつだいらさだのぶ）に抜擢されて白河藩の藩校「立教館（りっきょうかん）」教授となった千里啓（せんのりけい）が揮毫（きごう）した桃川神社御神号（ごしんごう）の掛軸（かけじく）が御神宝（ごしんぽう）として伝わっている。